

感染時の対応と感染後の体力低下と廃用症候群について

大和会 特別養護老人ホーム和光園

医務課 長島 舞

1. はじめに

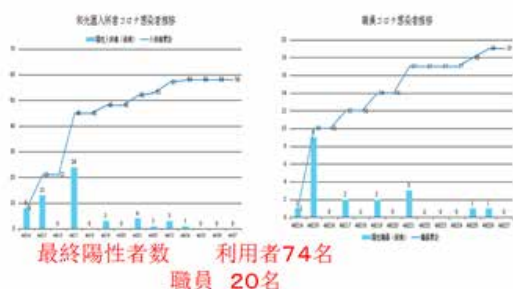
社会福祉法人 大和会 特別養護老人ホーム和光園は、昭和 40 年に東京都多摩市に開設された 3 階建て 130 床の従来型老人ホームである。

2020 年 1 月に日本国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されて以降、感染が拡大したことに伴い、当施設でも感染対策の強化をはかり利用者及び職員の毎日の体調管理のみならず、基本的感染対策の実施と職員向けの研修や知識の習得の強化を実施していた。

2020 年 12 月頃の東京都の感染状況の急激な悪化時期も、施設内での感染対策は継続して実施していた。しかし、2021 年 1 月 18 日当施設で最初の新型コロナウイルス陽性者が発生し、大規模クラスターへと発展した。収束までの約 2 か月間の間に起こった様々な事案や困難について報告する。

2. 感染者の発生と初動対応について

2021 年 1 月 15 日より 3 階フロアで発熱が数名発生した。発熱者の発生後、1 月 18 日有症状者 10 名を対象に、COVID-19 抗原・PCR 検査を実施。同日中に 8 名の抗原陽性者が判明し、うち 5 名が入院対応となった。感染者の発生に伴い、翌日 3F 利用者全員を対象に COVID-19 抗原・PCR 検査を実施。21/47 名が陽性判明し、南多摩保健所より 3F の残り 26 名を濃厚接触者として管理するよう指示を受ける。1 月 20 日保健所職員とともに厚生労働省管轄の DMA T 来園。感染状況の把握とともに、フロア毎のゾーニング・PPE 装着等について指導を受ける。次々と発生する発熱や体調不良者への対応、さらにこの間に職員の陽性者も複数発生したため、1 月 21 日から BCP に準じた業務の縮小と調整、及びゾーニングを実施する。3F は陽性者が居室全エリアに広がっており、陽性者エリア・濃厚接触者エリア・クリーンエリアをつくり、隔離対応。1 月 22 日 2F で陽性者が発生し、同 2F フロアの非陽性者が陽性者の居室を訪問しており、マスクなしで会話をしていた事案が発生したため、濃厚接触者の特定が困難と判断し 2F フロア全体を濃厚接触者として管理するよう指示を受け、開始する。



上記の感染状況をふまえ、非感染エリアの 1 F は基本的感染対策の実施、2F フロアは全体が濃厚接触者エリアのため、職員の PPE 着脱の負担や業務の動線を考え、ケアステーション以外の全エリアでの不織布ガウンを用い

たPPE装着、3Fは陽性者と濃厚接触者をエリア分けしエリア出入口にビニールガウンを用いたPPE着脱ゾーンを設置した。



3.入院対応時のトリアージの難しさと施設療養対応の大変さについて

糖尿病や呼吸器疾患などの基礎疾患の有無に加え、発熱や酸素飽和度の低下の有無等から優先順位を検討し保健所と相談のうえ入院調整を実施していたが、東京都の感染状況の悪化・医療体制の逼迫により、2~3名/日の入院対応が限界であった。そのため、施設内療養が必要となるケースも多数発生した。入院加療の判断基準となる数値等を目安に検討をしたが、新型コロナウイルス特有の一瞬で重症化するケースもあり、トリアージの難しさを痛感した。目の前で重症化する陽性者に対して限られた医療資源のなかでできることが限られており、看護師としての無力さを強く感じた。

陽性者エリアは特に巡視・バイタル測定を頻回におこなっていたが、夜間の排泄介助と巡視の間に急変しC P Aの状態で見つけたケースが発生。直ちに救急車を要請し、救急隊に救命を依頼するも、既に呼吸停止しており、社会死の判断を受ける。

その後警察の介入により、検視も実施された。救急搬送されることもなく、警察によって引き取られたご遺体を見送ることとなり、無機質に運ばれていく悲しさと同時に、改めてこの感染症の恐ろしさを感じた。巡視の際にも感染対策が必要なことによる職員への負担もあり、ケアの展開が制限されること、施設であるが故にモニター管理等の細やかな医療介入が困難であることを痛感し、陽性者の施設内療養の難しさを目の当たりにした。そのようなことが起こるなかで、緊張状態の続く毎日の業務にあたる際の職員の身体的・精神的疲弊が増し、仕事へ向かうモチベーションを保つことが難しいこともあった。

施設で療養終了を迎えた方も、入院療養を終え退院してきた方も、廃用症候群の進行やクラスター対応中 BCP に準じた業務縮小を行ったことに関連して、脱水の進行や尿路感染症等がみられ、それらの加療が必要となった。

施設内療養は、協力医療機関である厚生荘病院医師に指示や診察をその都度依頼してい

たが、常駐していないことや看護師も基本的には日勤帯の勤務のため、点滴・酸素投与等の医療行為にも限界があった。

夜間帯の急変時には救急車を要請していたが、搬送先が決まらず数時間経過してしまうことや、症状がさらに悪化してしまうケースもあった。東京都の感染状況の悪化に伴い、入院できる人数が限られており、すぐに入院対応をとれず施設待機が必要であること、入院できたとしても延命措置や積極的治療はできないことを家族に了承していただいたの入院対応としていたため、状況説明をする際の、相談員・看護師の精神的負担もかなり大きかったように感じると同時に、ご家族への精神的負担を少しでも軽減できるよう対応することに難しさを感じた。クラスター禍では、対面での説明や急変対応時のため十分な時間をとって説明をすることができないことへのジレンマも生じた。

施設内での陽性者療養に関連して、療養中に看取りケアの対象となった方がご家族との面会が不可能な状況であり、少しでも家族の時間を過ごしていただくことや、お互いの顔を見ることや声を聞くことによる安心感を得るために、LINE電話での面会を実施した。

最期の瞬間に立ち会えず、携帯の画面越しでの面会のみのため、直接みることも触れることもできずお別れの時間をもうける事ができないことへのもどかしさ、看護師としての無力さを痛感した時間となった。通常時であればエンゼルケアを行い、出棺の際にスタッフもお見送りができるが、それもできず出棺しなければならないこと、施設療養中に陽性者が亡くなった際は、納体袋への納体や棺への納棺作業をスタッフが行うことの精神的負担は、業務での肉体疲労よりも辛さと悲しみや命の重みを改めて実感した。

4. 非陽性者の著しいADLの低下

ゾーニングを実施し、全利用者が居室での配膳やベッド上での生活が続いたことによる筋力の著しい低下、それに伴い嚥下機能の低下や認知機能の低下もみられた。全身の筋力低下も顕著にあらわれ、良肢位の保持が困難となるケースもみられた。そのため、食事形態の変更や嚥下機能低下に伴い、誤嚥性肺炎のリスクを回避することの難しさを痛感した。

入院療養を終えた方が、食事・水分摂取量が十分とれず、急変し亡くなったケースが発生。また陽性者として施設内療養された方も同様に食事・水分摂取量が十分とれず、補液による管理を行っていたが、施設であるが故に十分な量の点滴ができず症状が悪化、入院が必要となった方が数件発生した。そして、非陽性者の方が脱水や尿路感染症等により急変し亡くなった方も数件発生した。陽性者への対応を最優先していたこと、そして感染対策を強化し業務にあたっていたことも影響し、非陽性者への対応が日々の業務の中で後手にまわってしまったことが大きな反省である。

BCPに準じた業務縮小に伴い、エネルギー量は同等とし食事提供回数や形態を変更したことと関連して、脱水や尿路感染が多発した。毎日の食事摂取の大切さや水分摂取量の必要性を改めて感じた。脱水や尿路感染症が頻発したため、予防策として水分摂取量把握の為一日のトータル水分量の他に、午前・午後の水分量を細かく把握し記載した。その報告用

紙を福祉課と医務課で情報共有し、早期対応ができるようになり必要時補液することで過度な脱水を防いだ。

しかし、点滴による補液管理の限界や顕著な脱水や尿路感染症、それにより入院となったケースや、そこからの体力低下と全身状態の悪化により永眠されるケースもあり、今まで当たり前のように行っていた入浴や食事の提供の必要性和大切さを改めて感じた。



5. クラスター収束後の施設内での感染症に対する意識の再確認

施設内での感染症対策として、感染症対策委員会を中心としたスタンダードプリコーションの勉強会、PPE着脱の基本動作の確認のための技術講習を定期的に施設内で実施している。感染対策に対しての意識付けや知識や技術の習得は、施設内の全職員が実施できるよう繰り返しの研修を継続して実施することにより、身につけてきていると感じている。

6. おわりに

大規模クラスターを経験し当時のことを改めて振り返ってみると、ただ毎日を必死に一日一日の業務をこなし、様々な方々の大きなサポートに支えられ、乗り越えることができ今日も元気に業務をこなすことが出来ている。自分が感染してしまうかもしれない恐怖や目の前で亡くなってしまいう方にできることがないことへの看護師としての無力さを感じ落ち込んだこと、想像をはるかに超える業務の多忙による疲労、仕事が終わりに自宅に帰っても家族と過ごす時間すらとれない毎日に、涙が止まらない日もあったこと、挫けてしまいそうになる日もあったが、支え励まし合いお互いを鼓舞した同僚や、看護師としての使命感、そして家族の理解やサポートもあったおかげで乗り越えることが出来た。そして罹患してしまった職員もクラスター業務にあたった職員も、一人もかけることなく終息を迎えることができ今日に至ることが出来たことにより、職員同士の結束が強まり、他課同士の連携がより強固なものとなった。

しかし、感染者をだしてしまったこと、またそれによりたくさんの命が失われてしまったことを忘れることはなく、その方々の命を無駄にせず、そこから得た教訓を日々の業務に活かしていきたいと思う。